

令和元年度リージョナルシアター事業
Regional Theatre Projects

事業報告書



目次

| | |
|---------------------------------|----|
| はじめに | 3 |
| 事業概要 | 4 |
| 派遣アーティストプロフィール | 6 |
| 事業の流れ | 7 |
| 各地のワークショップ・トピック | 8 |
| 能代市文化会館 （秋田県能代市） | 10 |
| アーティストレポート 田上豊 | 15 |
| 京都府立けいはんなホール （京都府） | 16 |
| アーティストレポート ごまのはえ | 21 |
| 松山市総合コミュニティセンター （愛媛県松山市） | 22 |
| アーティストレポート 多田淳之介 | 27 |
| 九重文化センター （大分県九重町） | 28 |
| アーティストレポート 福田修志 | 33 |
| 門川町総合文化会館 （宮崎県門川町） | 34 |
| アーティストレポート 有門正太郎 | 39 |

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携のもと、全国の地方公共団体や関連の公益法人などが実施する文化・芸術活動に対し支援を行うほか、財団の自主事業として、研修交流事業、公立文化施設活性化推進、調査研究等の事業に取り組んでいます。

平成26年度からはじまった本事業は、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに最大3回派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施する事業です。各参加ホールのプログラムは、地域のニーズに合わせて自由に企画され、小学校へ出向き授業時間を使って実施するアウトリーチ、幅広い年代の市民が交流するキッカケにするための公募ワークショップ、公立文化施設・自治体職員等が文化事業について考えるワークショップなど、多彩なプログラムとなりました。

この報告書は、「令和元年度リージョナルシアター事業」において実施した事業内容をまとめたものです。地域の公立文化施設の職員や地方公共団体の芸術文化担当者が、演劇の手法を活用したワークショップを企画される際や、公共ホールの担当者と地域の表現者の共同作業を行う際の参考としていただければ幸いです。

令和2年3月
一般財団法人 地域創造

事業概要

1 趣旨

一般財団法人地域創造は、公共ホールの活性化と創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホールスタッフ等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに派遣し演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

2 対象団体

①地方公共団体

②地方自治法第244条の2第3項の規定に基づき指定管理者として指定を受け、公の施設の管理を行う法人その他の団体

③地域における芸術文化活動の振興に資することを目的として設立された、公益財団法人等（②を除く。）のうち、地方公共団体が資本金、基本金その他これらに準ずるものを出資している法人で地域創造が特に認めるもの

3 事業内容

派遣された演劇の表現者（演出家、以下派遣アーティスト）と協働して地域や対象団体の課題やビジョンを元に事業を企画し、演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

（1）プログラムの実施時間

計840分のプログラムを実施します。

（2）派遣回数

最大3回の派遣を行います。1回目は打合せや内部の研修、アウトリーチ先の下見に充てます。残り2回でプログラムを実施しますが、連続した日程にするなど派遣回数を計2回とする場合は、2回目が原則5泊6日になります。

【実施時間の考え方】

〈プログラムの実施時間〉

1回目の下見を除いた派遣において計840分のプログラムを実施することができます。時間の配分は、参加団体と地域創造、アーティストの三者で調整します。規定の時間数や日数を超えるプログラムの場合は、別途謝金や経費が発生し、参加団体の負担となります。

〈学校でのアウトリーチについて〉

学校（小・中・高校等）の授業枠でアウトリーチを実施する場合、1コマの時間は、小学校では45分×2時限（90分）、中学・高校等では50分×2時限（100分）を最小限とします。また、1コマの対象人数は1クラス約30人を目安にしています。

4 支援措置

（1）一般財団法人地域創造が負担する経費

①派遣アーティストにかかる経費

派遣アーティストにかかる研修会及び、下見、プログラム実施にかかる派遣3回分までの

経費（謝金、交通費、宿泊費等）は地域創造が負担します。アウトリーチを実施する場合のアシスタント2名分の経費（謝金、交通費、宿泊費等）は地域創造が負担します。

（2）参加団体が負担する経費

①研修会参加にかかる経費

ホール担当者の研修会の旅費（交通費、宿泊費等）は、参加団体の負担になります。

②プログラム実施にかかる経費

プログラムを実施する際の経費（会場使用料、機材使用料、消耗品等）は、参加団体の負担となります。

③その他

規定の時間や日数を超える分の別途謝金や旅費等の経費は、参加団体の負担となります。参加申込書及び実施計画書を考慮の上、決定します。なお、派遣アーティストの指定はできません。

5 プログラムについて

演出家が地域で演劇のワークショップを行うことで、各地域の課題に取り組むことが可能になります。演劇の手法を使った学校でのアウトリーチ、地元の演劇人や学校の先生、行政職員を対象にした研修会、地元の若い演劇人が派遣アーティストのアシスタントとしてワークショップに関わりステップアップを試みる、子どもたちを対象に演劇に触れる時間を持つなど、地域独自の様々なプログラムを自由に企画していただけます。

派遣アーティスト プロフィール

派遣アーティストは派遣先の地域でワークショップを行う講師を務める他、実施団体の企画する事業の内容について、実施団体担当者と共に検討を行うコーディネーターの役割も兼ねます。

多田 淳之介（演出家、東京デスロック主宰）



©平岩亨

1976年生まれ。神奈川県・千葉県出身。演出家。東京デスロック主宰。

現代を生きる人々の当事者性をテーマに古典から現代劇、ダンス、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。地域、教育機関での子どもや演劇を専門としない人との創作、ワークショップ、韓国、東南アジアとの海外コラボレーションなど、演劇の協働力を軸にボーダーレスに活動する。2010年より富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督に公立劇場演劇部門の芸術監督として国内歴代最年少で就任、3期9年間務める。2014年『ガモメ カルメギ』が韓国の第50回東亜演劇賞演出賞を外国人として初受賞。東京芸術祭プランニングチームメンバー。APAF アジア舞台芸術ファームディレクター。青年団演出部。四国学院大学、女子美術大学非常勤講師。おもな演出作品に『再生』『ガモメ カルメギ』『ハッピーな日々』『BEAUTIFUL WATER』など。

田上 豊（劇作家・演出家、田上パル主宰）



劇作家／演出家／田上パル主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。

1983年熊本県生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。在学中に劇団「田上パル」を結成。方言を多用し、軽快なテンポと遊び心満載の演出で「揺らぐ人間像やその集団」を描き出すのを得意とする。劇団外でも、高校生、大学生とのクリエイション、市民劇団や公共ホール事業への書き下ろしなど、様々な形で活動を展開。特に近年では、全国各地の高校生と精力的に作品創作を行い、地域性を生かした演出法には定評がある。また、創作活動と並行して、創作型から体験型、育成講座まで幅広くワークショップも行う。劇団青年団演出部所属。

有門 正太郎（演出家・俳優、有門正太郎プレゼンツ主宰）



1975年生まれ北九州市出身。倉本聰主宰「富良野塾」、泊篤志代表「飛ぶ劇場」を経て、2005年「有門正太郎プレゼンツ」を始動。「笑顔になれば何でも出来る」を合い言葉に作、演出も務め全国でワークショップやアウトリーチ活動も行っている。俳優では様々な全国ツアー公演等に参加。高校演劇専科での講師経験を活かし、北九州芸術劇場「日韓合同キャンプ～チャレンジ！ えんげき～」の総合演出等も務める。役者として主な出演作品、富良野塾公演『今日、悲別で』『走る』（作・演出：倉本聰）、北九州芸術劇場プロデュース『錦鯉』（作・演出：土田英生）『江戸の青空』（作：千葉雅子、演出：G2）、時空の旅『シラノ・ド・ベルジュラック』（演出：永山智行）など。

福田 修志（劇作家・演出家、F's Company 代表）



1975年生まれ、長崎市出身。長崎大学教育学部卒。1997年にF's Company（フーズ・カンパニー）を旗揚げし、以後、作・演出を務める。現代社会の中に潜む人間の弱さを寓話化して描く作風が特徴。

長崎市主催の市民参加型舞台にも深く関わり、九州圏内の学校や地域での演劇ワークショップの講師や外部脚本の執筆、地元TVやラジオのCM出演なども行っている。

代表作『マチクイの詩』（第15回日本劇作家協会新人戯曲賞最終選考作品）、2009年度～長崎市自主文化事業『演劇による表現力育成事業』の講師、2011年度文化庁『次代を担う子どもの文化芸術体験事業（派遣事業）』の講師。

ごまのはえ（劇作家・演出家・俳優、ニットキャップシアター代表）



1977年大阪府生まれ。劇作家、演出家、俳優。佛教大学在学中より演劇をはじめ。1999年自身が劇団代表となって「ニットキャップシアター」を設立。以来、京都を創作の拠点に日本各都市で公演をおこなっている。作品には民族楽器の演奏や独自の身体表現が使われ、時に「わかりづらい」といわれる時もあるが元気に活動をつづけている。また近年は「古事記」にあるエピソードをもとに物語をつくっている。2004年『愛のテール』にてOMS戯曲賞大賞受賞。2005年『ヒラカタノート』にてOMS戯曲賞特別賞受賞。2019年『チェーホフも鳥の名前』が第64回岸田國士戯曲賞最終候補に選ばれる。特技はムックリ。

<アドバイザー> 内藤 裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長）

岩崎 正裕（劇作家・演出家、劇団太陽族代表）

事業の流れ

1

全体研修会

平成31年4月15日（月）～16日（火）

2

事業内容の調整・下見の調整

・派遣先への説明、日程調整

3

下見派遣（原則1泊2日）

派遣アーティストと地域創造担当者が現地を訪問し、打合せと会場下見等を行う。

4

事業内容の再調整・派遣先との調整

5

合意書の締結（三者）

・ワークショップ実施日程、内容決定
・経費負担の取り決め等

6

1回目派遣（原則3泊4日／2回目派遣と合わせて5泊6日も可）

プログラム実施

（派遣アーティスト×1名、アシスタント×2名、地域創造1～2名）

① 移動・打ち合わせ、② 実施1日目、③ 実施2日目、④ 移動

7

2回目派遣（原則3泊4日）

プログラム実施

（派遣アーティスト×1名、アシスタント×2名、地域創造1～2名）

① 移動・打ち合わせ、② 実施1日目、③ 実施2日目、④ フィードバック・移動

8

事業報告書提出（事業終了1ヶ月後）

各地のワークショップ・トピック

リージョナルシアター事業は、実施団体とアーティスト、地域創造の三者が対話をしながら地域やホールの課題や展望を鑑みてプログラムを作っていきます。

令和元年度の特徴的なプログラムをご紹介します。

演劇ワークショップの手法や効果を共有するプログラム

事業において協力関係を持ちたいと考える団体や事業実施団体の職員などを対象に演劇の手法によるワークショップの内容や効果を体験できるプログラムを実施することが可能です。教職員、行政職員、事業実施団体職員等を対象としたワークショップが実施されました。



会館・自治体職員向けワークショップ（京都府）



保育士等子育て関係職員向けワークショップ（門川町）

小学校の授業時間で行うアウトリーチプログラム

子どもへのアプローチとして、小学校の授業時間内で演劇の手法を使ったワークショップを実施しました。想像力をめいっぱい使うプログラムで、子どもたちも先生も、普段の授業では見られないクラスメイトの新たな一面を垣間見ることができました。



小学校アウトリーチ（松山市）



小規模校で全学年揃ってのアウトリーチ（九重町）

事業実施団体やホールの役割を市民に伝えるプログラム

市民が事業や文化施設についての理解を深めたり、これまで繋がりのなかった市民へのアプローチ、またホールへの親しみ・興味を喚起することを目的に、公募型のワークショップや、近隣小学校の児童をホールへ招いてのワークショップを実施しました。



夜の公民館を使って遊ぶワークショップ（九重町）



小学生をホールに招いてワークショップ（能代市）

ホールに関わる多様な人たちと地域の文化を考える場づくり

地域の文化の拠点であるホールが、地域と良好な関係を築き、ともに地域の文化について考えるプログラムを実施しました。自分たちの街を見つめ直し、じっくりと話し合う中で、様々なアイデアや交流が生まれました。



自分たちの街を見つめ直すワークショップ
(門川町)



財団職員と市職員が協働して文化を考える
(松山市)

短期集中による演劇創作プログラム

連続したコマを活用した短期集中での演劇作品の創作プログラムを実施。夏休みと冬休みを利用した短期集中プログラムで、普段は違う高校に通う生徒たちが一緒に作品を創作しました。



シアターゲームをしながら交流を深める(能代市)



台本づくりに取り組む高校生(能代市)

地域にある資源を活かしたプログラム

地域の農業や特産品など、地域資源を活用することで地域の魅力を多くの人に再発見してもらえるようなプログラムを実施。またモノの活用だけでなく、地域の歴史や記憶を紐解きながら物語をつくるプログラムを行うことで、地域住民の世代間交流につながりました。



町内のブルーベリー農園でワークショップ
(九重町)



地域の方からお話を聞き取る(京都府)

能代市文化会館（秋田県能代市）実施データ

| | |
|--|--|
| 実施団体 | NPO 法人能代市芸術文化協会 |
| 実施ホール | 能代市文化会館 |
| 担当者 | 近藤綾佳 |
| 実施期間 | 下見派遣 令和元年6月17日（月）～6月18日（火） 1回目派遣 令和元年8月28日（水）～8月30日（金） 2回目派遣 令和元年12月25日（水）～12月28日（土） |
| アーティスト等 | アーティスト：田上豊 アシスタント：日高啓介、伊藤昌子 |
| <p>■下見派遣内容</p> <p>6月17日（月）会館視察、湊城南小学校視察・打合せ、能代高校演劇部視察・打合せ 6月18日（火）市内視察、企画打合せ、能代松陽高校演劇部視察・打合せ</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>8月28日（水）打合せ、高校生演劇ワークショップ① 8月29日（木）南小学校ワークショップ① 南小学校ワークショップ② フィードバック 高校生演劇ワークショップ②</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>12月26日（木）打合せ、高校生創作劇ワークショップ③ 12月27日（金）高校生創作劇ワークショップ④ フィードバック</p> | |

スケジュール

| 派遣回 | 下見派遣 | | 1回目派遣 | | | 2回目派遣 | | | | |
|-------|------------------|------------------|---------------------------|---------------------------|-------------|--------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|----|
| | 6月17日 | 6月18日 | 8月28日 | 8月29日 | 8月30日 | 12月25日 | 12月26日 | 12月27日 | 12月28日 | |
| 9:00 | 移動 | 市内視察 打合せ | 移動 | 南小学校 WS ① 10:15～11:45 | 移動 | 移動 | 打合せ | 高校生 創作劇 WS ③ 14:00～18:00 | 高校生 創作劇 WS ④ 14:00～18:00 | 移動 |
| 10:00 | | | | | | | | | | |
| 11:00 | | | | | | | | | | |
| 12:00 | | | | | | | | | | |
| 13:00 | 会館視察 打合せ | 能代松陽高校 演劇部 視察 | 打合せ | 南小学校 WS ② 13:30～15:00 | フィード バック | 移動 | 高校生 創作劇 WS ③ 14:00～18:00 | 高校生 創作劇 WS ④ 14:00～18:00 | フィード バック | 移動 |
| 14:00 | | | | | | | | | | |
| 15:00 | 湊城南小学校 視察・打合せ | | | | | | | | | |
| 16:00 | 能代高校 演劇部視察 | 移動 | 高校生演劇 WS ① 17:00～19:00 | 高校生演劇 WS ② 17:00～19:00 | | | | | | |
| 17:00 | | | | | | | | | | |
| 18:00 | | | | | | | | | | |
| 19:00 | | | | | | | | | | |
| 20:00 | | | | | | | | | | |
| 21:00 | | | | | | | | | | |

プログラム詳細

高校生演劇ワークショップ「演劇と楽しく出会うワークショップ①」

8月28日（水）17：00～19：00

会場：能代市文化会館 中ホール

参加者：8名

市内の高校演劇部を対象に、演劇の合同ワークショップを実施。様々な遊びから演劇に触れることで、参加者同士の交流にも繋がった。市内の高校で演劇部があるのは2校だけで、今回は2校の演劇部と、演劇部のない高校からの生徒で合わせて8名が参加した。

最初は控えめで大人しかった参加者も、演劇を遊び感覚で体験していくうちに賑やかになり、他校同士の交流も見られた。

田上さんが用意した台本を、3人1チームで演じるワークショップでは、ホールの様々な場所を使って演じた。同じ台本でも、チームごとに全く違う演出が入っており、様々な創造性を共有し合えるワークショップとなった。



湊城南小学校4年 演劇ワークショップ

8月29日（木）1回目10：15～11：45／2回目13：30～15：00

会場：能代市文化会館

参加者：20名（1回目）／19名（2回目）

会館の近くにある小学校の4年生が参加。児童たちはホールに入ると「入るのは初めて」、「ここで踊ったことある」など、学校とは違う雰囲気に落ち着かない様子だった。2クラス別々にワークショップを行ってみて、同じ学校の学年でもクラスによって全く違うことがその場において分かった。どちらのクラスもゲーム感覚のワークショップを通して、表情豊かになり、周りを見る観察力や仲間と一つのものを創る協調性などが育まれたようにみえた。

ホールでのワークショップを継続するための一歩として、学校から歩いて会館に来られる小学校へ今回参加の依頼をした。徒歩では来られない学校への参加も今後視野に入れ、そのためにはどのような準備や対策が必要なのかを考えて続けていきたい。



高校生演劇ワークショップ「演劇と楽しく出会うワークショップ②」

8月29日（木）17：00～19：00

会場：能代市文化会館 中ホール

参加者：8名

高校生のワークショップ2日目も遊びながらの交流からスタート。みんなが知っている名作映画を即興で演じるワークショップでは、相手の演じた動きをみてから自分がどう演じるのかというのを瞬時に考え、アドリブで劇を繋げていくということの難しさを体験した。

ワークショップの最後には、創作台本の作り方を知りたいという参加者の質問に答えて、創作劇の作り方を学んだ。自身の実体験をもとに、登場人物や物語の起承転結を書き出した。普段の演劇活動では学ぶ機会がなく、手探りなまま取り組んでいた参加者も、今回のワークショップ内容を通して今後の演劇活動に活かしたいと話していた。



プログラム詳細

高校生演劇ワークショップ「創作劇ワークショップ③④」

12月26日（木）14：00～18：00

12月27日（金）14：00～18：00

会場：能代市文化会館

参加者：7名（26日）／6名（27日）

夏に実施した高校生WSの内容を活かして、20分ほどの創作劇づくりに挑戦した。事前に、劇の構成、配役を田上さんに決めていただき、1シーンごとアドリブで演じていく。台本はなく、そのシーンで登場する人が何をして何を伝えるのかだけを決めて、エチュードのような形で劇を創っていく。アシスタントの2名も高校生と一緒に共演してもらい、8名のキャストによる創作劇が完成した。また、演じる会場はステージとは違い、多目的スペースとなっている場所を使用した。いつもと違う環境での演出は高校生にとっても新鮮だった。

翌日、参加者の友人や当館職員を観客に、創作劇を発表した。演者と観客の距離が近く、最初は緊張していた様子だったが、役になりきって最後まで楽しんで演じているようだった。

発表後のディスカッションでは、「今まで体験したことのない演劇でとても楽しかった」、「こういった劇の作り方があることを学べたので、自分たちの部活動でも挑戦してみたい」といった感想があった。また、今回のように各高校の演劇部が合同で劇を共作したいという声もあり、会館側としても会場の提供だけでなく、高校生同士が交流し、集まる会館として運営していきたいと思った。



●この事業への参加動機

- ・全国平均以上に少子高齢化が進んでいる能代市では、世代間交流や同世代の交流の場が、とても少なくなっています。文化会館を見るためだけの場所と認知している市民も多いが、ホールはコミュニティの場であり、継続的に人と人との交流、地域の活性化に取り組める場所でもあります。演劇をとおして、もっと身近に文化会館を感じてもらい、また楽しんでもらうために、体験する演劇ワークショップの実施ができればと思います。
- ・文化会館が会場の提供だけでなく拠点となるように運営をするために、まずは市民に会館ではどんなことが行われているのかを知ってもらうきっかけを作りたいと思いました。そのため派遣アーティストと連携し、地域課題にあったプログラムを実施できることにとても魅力を感じました。
- ・この地域では、高校生による音楽コンサートは実施されていますが、演劇公演は実施されていません。そのため、市民の演劇鑑賞の機会も少ないためか、演劇活動をする人が減少している現状です。いつの日か高校生の演劇公演を定期的に当館にて開催し、高校演劇をもっと身近に楽しんでもらいたいと考えております。

●企画・実施において苦労した点

- ・地域では、演劇活動において取り組みたい企画や課題が多く、内容が一つに定まるまで時間がかかりました。ただ取り組んでみたいことだけを念頭に考えるのではなく、今後のビジョンも考えたうえでどう企画するのか、会館として取り組むべきことはなんなのかを改めて考え直しました。限られた時間で、だれをターゲットにどういった内容のワークショップを行うか考えた結果、活動人数が減少している高校演劇部を集めたワークショップと、小学生が会館で行うワークショップの2種類を実施しました。
- ・今回のワークショップは、高校演劇部や小学校の学級に参加を依頼しました。小学生に関しては、授業の一環として演劇文化の体験を取り入れることの魅力を伝え、今後継続していくきっかけとなってほしいと考えました。高校演劇部のワークショップに関しては、一般公募で演劇活動を実際していない人にも参加して、演劇の幅を広げられたのですが、以前行った演劇ワークショップ一般公募にて、あまり集客ができなかったため、人数は少ないが高校演劇部にターゲットをしばって参加者を集めました。
- ・参加人数が少ないことについては、初めから関係者で情報は共有しておりました。人数が少なくてもワークショップはできるという言葉に安心しておりました。ですが、創作劇ワークショップを行うにあたり、欠席者がでてしまい田上さんが用意した構成通りにいかないこともありました。どうしても人数が少なければ少ないほど、欠席者の穴が大きくなってしまいますので、参加者の取りまとめはもっと慎重に行う必要があると感じました。

●プログラムを実施した成果

- ・2種類のワークショップどちらも、こちらから出向くアウトリーチではなく来てもらうワークショップにしたのは、会館を身近に感じてもらう、楽しい場所と認知してもらうためです。いつもは公演を見に来たり、発表会でステージに立ったりしていた会館で演劇体験ができたことは、会館をまた違う見方で感じ、楽しい場所という認知に変わるきっかけになったと思います。
- ・高校生ワークショップでは、他館の演劇部が交流する機会を提供し、親睦を深めることができたように思いました。部員が2人しかいない高校の生徒は、普段の部活動ではできない、大人数での演技ができてとても楽しかったと話していました。発表後の高校生含めたフィードバックでは、今後もこのような合同のワークショップに参加してみたい、自分たちの創ったものを人に見てもらいたいという声もあり、今後も高校生が求めている演劇活動のサポート運営を会館として、していきたいと思いました。今回各高校演劇部の顧問の先生だけでなく、演劇部生徒とも繋がるきっかけとなったことがよかったと思っています。

●今後の展望

- ・今回は会館から一番近い小学校の生徒に徒歩で会館に来てもらいワークショップを実施してもらったが、徒歩では来られない小学校も会館で行うワークショップに参加できるような運営に取り組み、会館に足を運んでもらう生徒を増やしたいと思います。また、学校としても会館での演劇ワークショップが年間授業の一環として組み込まれるほど恒例化となるように会館と学校との連携づくりを大切にしたいと思います。
- ・高校演劇部が会館をもっと利用し身近に感じてもらうために、顧問や生徒との定期的な情報共有をして、繋がりを維持していきたいと思います。市内の演劇部員数は少ないですが、続けていくことが大事であると考えます。

諦めたらそこで試合終了である

田上 豊

能代市は、秋田県の北部に位置し、日本海に面している。また能代といえば、能代工業高校が有名でバスケットの街という印象が強く、夏になれば能代役七夕にて巨大な灯籠が街を練り歩くことでも多く知られている。あと、秋田（能代も含め）は、なんと言ってもなまはげだ。「なまはげのいる酒場」と銘打たれた店に入ってみれば、カウンター奥の一角に等身大サイズの「なまはげ（人形）」が鎮座している。あのなまはげを見て、改めて「そうか、ここは秋田なのだ」と強烈に実感したことが懐かしい。

さて、今回訪れた劇場は、能代市文化会館。敷地の中に図書館や公民館などの公共施設が立ち並び、市民の文化活動を支えている。今回担当してくれた劇場職員の近藤さんは、元高校演劇部の出身で、この度のリージョナルでは地域の高校生（主に演劇部）に「特別な体験」をしてほしいという願いの元、この事業に手を挙げてくれたそう。私感ではあるが、一昔前の地域創造のリージョナルシアター事業だったならば、演劇部の高校生対象ワークショップは敬遠されがちだった。社会包摂の視点から、もっとも集めやすいとされる演劇部の生徒に的を絞るのではなく、もっと広く「演劇に興味がない者」も含めて矢印を向けるべきだという共通認識があったからだ。しかし、能代のような少子高齢化の進んでいる地域において（場所にもよるが）は、演劇部の生徒を集めるだけでも大変なことであり、そこには、地方における人口の減少という切実な社会問題が立ちはだかっている。今回の滞在では、そういった状況下でリージョナルの理念とどうバランスをとりながらプログラムを組むのかについて、大いに考えさせられる機会となった。

結果として、能代リージョナルのメインプログラムは、能代で演劇活動（演劇部を含む）をしている、もしくは演劇に興味がある高校生とのミニクリエーションと定まった。東京に拠点を置くプロと能代の高校生とが出会えばどういった化学反応が起こるのか。それを探るシミュレーションである。プロの俳優を二名アシスタントで随行させ、演技について直接話をしてもらったことで高校生たちは興味津々だったようだ。また、限りある時間の中で短編作品の創作・発表に挑み、プロの俳優との意見交換や共演を通して、普段の活動にない経験ができたのではないかと思う。「共演したり、演技の仕方を教えてもらえて嬉しかった。でも、一番嬉しかったのは、私たちが演劇の楽しいと感じている部分とプロの人たちの楽しいと感じている部分が同じで、明日からもっと演劇を楽しめそう。これは、一参加者の感想であるが、特別な体験の中にプロとの共感や共鳴があったこと、そしてそれが何よりも高校生たちの一番の収穫になったこと、これこそが何よりも嬉しいと思った。

この感想を実際に耳にした時、担当者の近藤さんに企画立案の段階で何度も問いかけた「プロと出会わせて何を見たいのか」という出題は、その質問自体がナンセンスだった感じ、反省した。出会って作った先に見えるものは、作ってみたいとわからない。近藤さんが見たかったものが、今回のリージョナルで表出したのかは定かではない。しかし、プロと高校生との共作の末に近藤さんに見えたものが「プロと出会わせて何を見たいのか」の答えだったと信じ、今度の取り組みに生かしてくれることを切に願っている。地方の劇場は、今後ますます進む少子高齢化の問題と向き合い、地域に見合った文化事業を進めざるを得ない現実が待っている。この命題に簡単な解決策など存在しないが、打破の手かがりを探り、ユニークな方法で取り組んでいる地域もある。決して能代のことを指しているわけではないが、どんな理由があろうとも文化がないがしろにされる地域に未来はないと思う。劇場は、そのことを踏まえ、地域にとって何をすべきなのかを今一度考え直す時期が到来しているのだと感じている。

京都府立けいはんなホール（京都府）実施データ

| | |
|---|---|
| 実施団体 | 株式会社けいはんな |
| 実施ホール | 京都府立けいはんなホール |
| 担当者 | 伊藤佐和子 |
| 実施期間 | 下見派遣 令和元年5月13日（月）～5月14日（火） 1回目派遣 令和元年8月4日（日）～8月5日（月） 2回目派遣 令和元年8月9日（金）～8月10日（土） |
| アーティスト等 | アーティスト：ごまのはえ アシスタント：高原綾子、池川貴清 |
| <p>■下見派遣内容</p> <p>5月13日（月）館内視察、ワークショップで使用する題材写真の確認・選定（精華町教育委員会）</p> <p>5月14日（火）ワークショップで使用する題材写真の確認・選定（山城郷土資料館）、企画内容打合せ、インリーチ</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>8月4日（日）台本づくりのワークショップ①『昔の話を聞いて台本をつくろう1・2』</p> <p>8月5日（月）音と声のワークショップ①『ヘンテコ楽器で音をつくろう』 会館・自治体職員等関係者向けワークショップ フィードバック、次回に向けた打合せ</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>8月9日（金）音と声のワークショップ②『台本を読もう 台本に合わせて音をつくろう1・2』</p> <p>8月10日（土）音と声のワークショップ③『録音をしよう』『発表会をしよう』 台本づくりのワークショップ②『発表会をしよう』 フィードバック</p> | |

スケジュール

| 派遣回 月日 | 下見派遣 | | 1回目派遣 | | 2回目派遣 | | |
|-----------|------------------------|-----------------------|------------------------|-------------------------|-------|-------------------------|------------------------------------|
| | 5月13日 | 5月14日 | 8月4日 | 8月5日 | 8月8日 | 8月9日 | 8月10日 |
| 9:00 | | | 移動 | | | | |
| 10:00 | | 山城郷土 資料館 (写真選定) | | 音と声 WS ① 10:00～12:00 | | 音と声 WS ② 10:30～12:00 | 音と声 WS ③ 10:30～12:00 |
| 11:00 | 移動 | | | | | | |
| 12:00 | | | | | | | |
| 13:00 | 打合せ | インリーチ | 台本 WS ① 13:00～14:30 | | | 音と声 WS ② 13:00～16:00 | 音と声 WS ③ 台本 WS ② 13:00～15:00 |
| 14:00 | 精華町 教育委員会 (写真選定) | | | | | | |
| 15:00 | | | 台本 WS ① 15:00～16:00 | 関係者 WS 15:00～16:30 | | | |
| 16:00 | | 打合せ | | | | | |
| 17:00 | 館内案内 | | | フィード バック | | | フィード バック |
| 18:00 | | 移動 | | | | | |
| 19:00 | | | | 移動 | | | 懇親会 |
| 20:00 | | | | | | | |
| 21:00 | | | | | 移動 | | 移動 |

プログラム詳細

台本づくりのワークショップ①「昔の話を聞いて台本をつくろう1」

8月4日（日）13：00～14：30

会場：京都府立けいはんなホール 小会議室

参加者：4名（※一般公募2名、会館職員2名）

一般公募で、事業の最終日に行う朗読劇の発表会に向け台本を書きたい人を募集。3名の参加を予定していたが、急遽1名欠席、2名の参加となったため本ワークショップには会館職員も一緒に参加することになった。自己紹介では、2枚のイラストを見て、どちらが先で、なぜそう考えたのかを各自発表。時間や季節、描かれている人の人物像など、多様な解釈があり、和んだ場となった。その後、締め切りまでに、台本創作することを念頭に、台本の書き方のコツのレクチャーを受けた。今回創作の題材とする地域で撮影された昔の写真を全員で確認、2部の聞き取りワークショップで、質問したいことなどを考えた。



台本づくりのワークショップ①「昔の話を聞いて台本をつくろう2」

8月4日（日）15：00～16：00

会場：京都府立けいはんなホール 小会議室

参加者：6名（※一般公募2名、語り手2名、会館職員2名）

街の生活史に詳しい70代、80代の男女2名を語り手として招き、写真を介して交流を行った。積極的に質問が飛び交いあつという間の1時間であった。

写真は、精華町教育委員会・山城郷土資料館で所蔵のものをお借りし、どの写真にも今の新興住宅地生活とは違うエピソードが多くあり、質問が付きず、充実した対話の時間となった。

語り手の方々からは、「孫にも話をしたことないような内容をたくさん話した」「思い出したことが多くあった」との感想があり、出来上がりを楽しみにされている様子であった。



音と声のワークショップ①「ヘンテコ楽器で音をつくろう」

8月5日（月）10：00～12：00

会場：京都府立けいはんなホール 中会議室

参加者：14名

民族楽器や“楽器のようなもの”の名前や音の鳴らし方を教えてもらい、与えられたお題の音をつくり表現、何の音を表現しているのか想像し当て合った。（お題は、「夕立」「夜の田んぼ」「ふみきり」「初恋」「おばけ」「腹痛」。）

参加者は、今まで触れたことのない楽器の数々に興味深々であった。

また後半には前半でつくった音のテーマを全て盛り込んだ台本が登場、俳優の動きに合わせて音を加え、物語を立体化する過程を体験。次回の発表会に向けたワークショップへの足がかりとした。真剣な俳優の動きにくぎ付けになる子どもたちの様子が印象的であった。



プログラム詳細

会館・自治体職員等関係者向け 特別ワークショップ

8月5日（月）15：00～16：30

会場：京都府立けいはんなホール 中会議室

参加者：8名

会館職員・自治体職員・教員を対象に、今後の企画運営や、教育手法の参考にさせていただくことを目的に体験ワークショップを企画。午前中に行った「ヘンテコ楽器で音をつくろう」を、ごまのはえさんに事業意図やこれまでワークショップ経験などもお話しいただきながら実際に体験した。

当ホールからは、経営陣や新任スタッフが参加。

体験することで今後の自主事業をどのように考えていくのか、課題を共有する機会となった。



音と声のワークショップ②「台本を読もう 台本に合わせて音をつくろう1」

8月9日（金）10：30～12：00

会場：京都府立けいはんなホール イベントホール

参加者：7名

小学生3名、大人3名が参加。台本ワークショップを経て、出来上がった台本を使い、ボイスドラマを6作品つくることになった。ウォーミングアップで体を動かした後、アーティストと大人の参加者で台本を読み合わせ、子どもたちと一緒に昔の写真を見て、どの写真でこの作品を書いたのかを考へたり当時の状況を思い浮かべたりした。

その後、2チームに分かれ台本を読み、どんな音があるかよいか意見を出し合い、制作を進めた。大人も子どももヘンテコ楽器をさわり自主的に物語の「音」を探している様子が印象的であった。



音と声のワークショップ②「台本を読もう 台本に合わせて音をつくろう2」

8月9日（金）13：00～16：00

会場：京都府立けいはんなホール イベントホール

参加者：7名

午前のプログラムの延長で、作品の制作を続けた。

台本を何度か読むうちに、だんだんと声に力が入り、「水滴」「風」「うれしい気持ち」など作った音を、合わせると物語に立体感が出てきて、だんだんと参加者が盛り上がっていく様子を感じられた。

3作品が出来上がり録音に挑んだ。マイクなど普段目にすることの少ない録音機材を前に、緊張した様子の参加者もいたが、録音後出来上がった作品を聞くと口々に感想を言い合い和んだ空気となった。「このセリフが聞き取りづらい」「もっと鳥の音は遠くてもよいのでは」など具体的な意見も出て作品へのイメージが明確になった。だんだんと世代を超えたメンバーが本気になっていく様子が伺えた。



プログラム詳細

音と声のワークショップ③「録音をしよう」

8月10日（土）10：30～12：00

会場：京都府立けいはんなホール イベントホール

参加者：6名

昨日から引き続き制作を進めている作品の録音を行いながら、小学校の引っ越しの様子を描いた作品「一番乗り」の制作に取り掛かった。登場人物が多く全員が役者も音も担当する作品であるが、参加した小学生たちが活躍し、生き生きとした作品に仕上がった。

午後の発表会で披露する6作品が完成し、全作品を録音することが出来た。発表会に向けたリハーサルでは、順番を意識し、自分たちの発表で使う楽器が必要なタイミングで使えるように揃え並び替えるなど、大人が準備する様子を見て子どもも自主的な準備を行っていた。



台本づくりワークショップ② / 音と声のワークショップ③「発表会をしよう」

8月10日（土）13：00～15：00

会場：京都府立けいはんなホール イベントホール

参加者：26名（参加者6名、来場者20名）

ワークショップの一環として発表会を行い、制作した6本のボイスドラマを上演。20名程度の来場者は1枚の写真からつくられた物語に想像を巡らせた。

上演後は、参加者と来場者が円になって座談会を行った。

来場者からは「音のつけ方がおもしろかった」「写真の見方が変わった」などの感想があり、また、牛の写真を見た男性は、昔登校中に出産シーンに出くわし学校に遅刻した、など参加者からも当時の話を聞くことができ、よい世代間交流の時間となった。



●この事業への参加動機

(株)けいはんなは、関西文化学術研究都市建設促進法に基づき、内閣総理大臣から指定を受け文化学術研究交流施設「けいはんなプラザ」を運営してきましたが、平成20年に民事再生の申立をし、認可決定を受けました。その後、京都府立けいはんなホールの指定管理者として館を運営、再生スキームにより経営再編を行い平成30年に全ての返済が終了したところです。民事再生中は貸館を中心に事業を展開、自主事業は芸術性が高くとも収益が見込めない事業は控えてきました。返済を終えた今後、助成金や各種支援制度を利用し文化的芸術的な事業を、どのような方針で展開すべきか考える機会とすべく参加いたしました。

●企画・実施において苦労した点

集客です。新興住宅地であり全国有数の人口増加地域である本地域では、これまで子どもを対象とした催しはよく賑わうのですが、今回の事業においては集客に大変苦労しました。地元教育委員会に相談に行くも、「演劇は本地域で難しいと思う」との回答。小中学校全員への学校へのチラシ配布で十分な集客を期待していましたが、演劇への関心があまりない地域で「自ら答えを導き出すワークショップ」を「チラシで伝える」ことは想像以上に難しいものでした。

地域に劇団がなく市内の劇団や演劇サークルなどにも声をかけましたが、3日間という長期間も参加にはハードルが高かったように思います。

なかなか社内に本事業の意図を周知しきれなかったことも集客苦戦の要因のひとつです。元来自主事業に対して経験が少なく、また演劇に対してはスタッフ自身にもなじみの薄い分野であり「よくわからないもの」について、多忙なスタッフは手を出せなかったというのが現実でした。下見の際にインリーチの時間をとっていただくも、スタッフ・管理職の参加が十分にならず、事前の調整の甘さを反省しました。

●プログラムを実施した成果

少ない人数ではありましたが、テーマとした『世代間の交流を通し地域への愛着を醸成すること』については成果が得られたと思います。写真のことを地域のお年寄りに聞くこと、発表会を終えて見に来られた方との座談会、地域の方々が「あの頃は…」と話をされた様子は、まさにこの地域で埋もれていたことが、本事業を通して舞い上がったと感じました。

「また来年も参加したい」との声もあり参加者の満足度、達成感も高かったように思います。ごまのはえさん、アシスタントの方々がひとりひとり手厚く関わってくださり、子どもたちも積極的に参加できました。「本気の大人」と考えを伝え合い、子どもたちがワクワクしていく様子、本気になっていく様子は、演劇の手法を取り入れたものだからこそその面白さであると感じました。結果世代をこえた仲間たちで6本の作品を作ることができました。

演劇が身近でない地域で、演劇ワークショップに興味関心のある方とつながりが持てたことも次回につながる大きな成果です。学校の先生が見学に来られ、京都府の地域アートディレクターの方も連絡をくださり参加いただきました。

最後に、苦労の点と重なりますが、事業運営の在り方、このような収益を伴わない事業を実施することの意味について一石を投じることができたことは、大きな成果であったと思います。

課題や疑問の声があがり意見を出し合う環境になった今、今後前に進んでいく為のスタートに立てたと感じています。

●今後の展望

地域文化芸術を継承・創造・発信する場として、また住民が集い、創造性を育み、感動と希望をもたらす、絆を形成する場としての原点に立ち返り、改めて私たちのミッションは何なのか、どのような事業を展開していくのか。今回の結果を踏まえ、関係者との対話の時間を設けながら取り組み、「ホールに足を運んでくれる人の増加」「地域文化の担い手の育成」につなげていきたいと考えています。

過程が大事

ごまのはえ

「けいはんな」とは京都、大阪、奈良から一文字ずつとった言葉で、文字通り二府一県の境が接する地域だ。自治体では「精華町」「木津川町」「京田辺市」など七市一町からなる。1980年代から「関西文化学術研究都市構想」が企画されこの地域が選ばれた。「けいはんな」とは地元自治体の上に建てられた理念先行の街と言えるだろう。バブル経済の崩壊を乗り越え、現在は企業誘致も進み、住民の数も増え続けている。そこに建つ「けいはんなホール」が今回の実施団体である。「けいはんなホール」ではこれまで音楽や科学のワークショップの実績はあるが、演劇はこれがはじめてだ。

今回実施したプログラムは次のような内容である。地元の方から昔の写真を提供してもらい、そこから着想を得て参加者と脚本ワークショップを行う。そこで出来た作品を参加者と共に生演奏付き朗読劇として発表する。

まず写真は、地元精華町の町役場と京都府立の郷土資料館からお借りすることができた。写真は年代や場所も一目でわかるように美しく整理されていた。膨大な写真の中から、小学校の写真、川遊びの写真、鉄道の写真などを選んだ。

脚本ワークショップではまず参加者に気になる写真を選んでもらった。そして地元の年配の方々にお越しいただき、参加者からの質問に答えてもらった。茶話会のような柔らかい雰囲気をもちつつ話しは多岐にわたり、「けいはんな」地域の昔の生活をほんやりだか感じることができた。出来上がった作品は10本。このうち地元の高校生が書いた『西瓜』という作品は、この地域で昔特産品だった「川西西瓜」の出荷の様子の写真と、野原に青年らが映った写真から着想を得て創作した。将来脚本家を目指しているという彼は真剣そのもので、地元の年配の方との受け答えも熱を帯びたものになった。

日を改め、次は出来た作品を生演奏付き朗読劇にするワークショップだ。ここで言う生演奏とは民族楽器をつかって劇中の効果音(汽車の音・牛の鳴き声など)を表現することだ。このワークショップは小学生の参加者が多く、皆でセリフを朗読したり、汽車の音を想像したり大人たちと混じって真剣に遊んでいた。セリフも音も昔のことばかりなので、ワークショップではまず想像し、それを創造につなげてゆく。とても難しい作業だが、子どもたちはその壁を次々に飛び越していった。

発表には参加者の家族や、別の用件で会場に来ていた人など、様々な人が来てくれた。本番を控えた子どもたちは、意外なほど落ち着いて、何やら自信ありげにも見えた。私が特に印象に残ったのは『魚とり』という作品。この地域では毎年冬に集落のため池の水を抜いて、そこで育ったフナを集落の皆でわかちあう行事があり、その行事とそれに参加する親子の絆を描いた作品だ。劇中に登場する少女役を、現代の少女が演じていたが、時代が大きく変わっても変わらない親子の様子を感じられてとても愛らしい作品だった。

発表会の後でお客さんもまじえて座談会を行った。着想のもとになった写真も観ながら、昔を懐かしんだり、発表した子どもたちの健闘を称えたりした。

以上でこのプログラムは終了した。

演劇をつくる過程は様々な人をつなぐ。今回もそれぞれの過程において様々な出会いがあった。特に町役場に保管されていた写真たちと、私たち演劇人の出会いは印象的だった。沈殿していた地域の記憶が、演劇の手に触れたことで舞い上がったように感じた。同じことは脚本ワークショップでの、年配の方とワークショップ参加者の会話にも言える。年配の方々の深い場所に沈殿していた記憶が、参加者に質問にされることで舞い上がる。改めてこのプログラムが、地元の方々に支えられて成り立つことを実感した。

松山市総合コミュニティセンター（愛媛県松山市）実施データ

| | |
|--|--|
| 実施団体 | 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 |
| 実施ホール | 松山市総合コミュニティセンター |
| 担当者 | 藤原淳貴 |
| 実施期間 | 下見派遣 令和元年7月17日（水）～7月18日（木） 1回目派遣 令和元年7月23日（火）～7月26日（金） 2回目派遣 令和2年1月27日（月）～1月30日（木） |
| アーティスト等 | アーティスト：多田淳之介 アシスタント：佐山和泉、松崎義邦 アドバイザー：岩崎正裕（2回目視察） |
| <p>■下見派遣内容</p> <p>7月17日（水）打合せ、下見（松山市総合コミュニティセンター、松山市民会館） 7月18日（木）打合せ、下見（松山市総合コミュニティセンター）</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>7月23日（火）打合せ、下見（松山市民会館） 7月24日（水）えんげきをつくろう①、下見（東雲小学校） 7月25日（木）えんげきをつくろう②、職員インリーチ①</p> <p>■2回目派遣</p> <p>1月28日（火）東雲小学校アウトリーチ①、街と私の物語を見つけるワークショップ 1月29日（水）東雲小学校アウトリーチ②、職員インリーチ② 1月30日（木）フィードバック</p> | |

スケジュール

| 派遣回 | 下見派遣 | | 1回目派遣 | | | | 2回目派遣 | | | |
|-------|-------------------------|-------------------------|-------|-----------|-------------------------|-------|-------|-----------------------------------|--------------------------------|-------------|
| | 7月17日 | 7月18日 | 7月23日 | 7月24日 | 7月25日 | 7月26日 | 1月27日 | 1月28日 | 1月29日 | 1月30日 |
| 9:00 | 移動 | | 移動 | | | 移動 | 移動 | 東雲小学校 アウトリーチ① 9:35～11:25 | 東雲小学校 アウトリーチ② 9:35～11:25 | フィード バック |
| 10:00 | | | | | | | | | | |
| 11:00 | | | | | | | | | | |
| 12:00 | 打合せ・下見（松山市総合コミュニティセンター） | 打合せ・下見（松山市総合コミュニティセンター） | 移動 | 下見（東雲小学校） | | | 移動 | | | 移動 |
| 13:00 | | | | | | | | | | |
| 14:00 | | | | | | | | | | |
| 15:00 | 下見（松山市民会館） | | | | 職員インリーチ① 15:00～17:00 | | | | 職員インリーチ② 14:00～17:00 | 移動 |
| 16:00 | | | | | | | | | | |
| 17:00 | 下見（松山市民会館） | | | | | | | | | |
| 18:00 | | | | | | | | | | |
| 19:00 | | 移動 | | | | | | 街と私の物語を見つけるワークショップ 19:00～21:00 | 意見交換会 | |
| 20:00 | | | | | | | | | | |
| 21:00 | | | | | | | | | | |

プログラム詳細

子ども向けワークショップ「えんげきをつくろう」

7月24日（水）10：00～12：00

7月25日（木）10：00～12：00

会場：松山市民会館小ホール

参加者：27名（小学4～6年生）

はじめて会った友だちと短い劇をつくるワークショップ。

1日目は「演劇にはなにが必要か」を多田さん（TJ）と一緒に考え、お互いを知るためにグループ分けを数回行った。TJがエアなわとびを行い、見えないロープを見えるようにするのが演劇であると伝える。子どもたちが3、4人のグループに分かれ、身体を使ってケーキや学校の場所を表現し、1日目は終了。

2日目、ウォーミングアップとして「だるまさんの一日」を行う。TJがランダムで5人のチームを作り、各チームで劇を作る。劇の内容は、各チームがくじ引きで「主人公」を決め、その主人公が困っていることを考え、再びくじを引き、くじに書かれてある「モノ」で困っていることを解決するというもの。

TJが「演劇は協力することが大切であり、演劇をするといろんな自分に気づき、いつもと違う自分が出てくる。いろんな自分を見つけてほしい」と参加者に伝え終了。



職員向けインリーチ①「ワークショップ体験」

7月25日（木）15：00～17：00

会場：松山市民会館小ホール

参加者：13名（財団職員8名、松山市職員5名）

ワークショップは実際にどんなことをするのか、財団職員と松山市職員を対象にワークショップ体験を行う。互いに初めて会う人もいたので自己紹介。各自呼んでほしい名前を名乗り名前でパスをする。最初は目を見て、次に名前と拍手、最後に名前と拍手と「ほよよーん」でパス。

3人チームを作りしりとり。しりとりのやり取りを台本にして再現。その後、台本なしで再現、拍手だけで再現と、言葉を使わないで表現した。また、拍手だけでトークしたり、立ち座りだけでトークを行った。表現方法はいろいろあるが伝わりにくく、伝わらないことを踏まえて考えるべきでありその上で想像力を働かせることが必要。

ワークショップは「教えない」ものであり、その日のうちに効果が出るものではないとTJから解説。財団職員と、松山市職員の交流も図れた。



プログラム詳細

東雲小学校アウトリーチ

1月28日（火）9：35～11：25（4年1組）

1月29日（水）9：35～11：25（4年2組）

会場：松山市立東雲小学校

参加者：32名（1組）、31名（2組）

演劇を使ったワークショップを東雲小学校で行う。

アーティスト（TJ）と、アシスタント2名が自己紹介を兼ねて短い劇を見せる。全員でエアなわとびを行った後、グループ分けを数回行った。2人でねこの形、6、7人のグループで飛行機の形を作ったあと、分かれたグループごとにTJが指定した「学校の場所」をつくり、ほかの生徒がどの場所をつくったのかを当てていった。

その後、「転校生がくる」をテーマに各グループで短い劇をつくり発表した。それぞれ、怒りっぽい、マイペース、やさしい、せっかち、泣き虫、臆病、真面目、の性格を決め、先生、生徒、転校生の役も各グループで話し合って決めた。みんなで誰がどの性格を演じているか当てていった。TJから、見せることだけでなく、見ることも大事であり両方の協力が必要である。人の見えている部分は一部分しか見えておらず、いろんな所を見えるように、見る力を鍛えてほしいと最後に伝えられた。

担任の先生から、みんなと一緒に時間を過ごすことが難しい支援学級の子が、一緒に劇をつくることができている良かった、普段と違う姿が見られた、との言葉を頂いた。



一般向けワークショップ「街と私の物語を見つけるワークショップ」

1月28日（火）19：00～21：00

会場：松山市総合コミュニティセンターこども館

参加者：19名

地域の思い出の場所、記憶をもとに、街への想いを表現する小さな演劇作品を作るワークショップ。

自己紹介を一人ずつ行った後、血液型、好きな色、好きな数字、松山と言えば、のお題でグループ分けを行う。自分の好きな松山の場所を考え発表。それぞれが惹かれたところに挙手をして、そのグループごとに劇をつくる。各テーマは、「城山公園」「道後」「河川敷」「商店街のたぬきの像」。unhappyな人がその場所に行くとhappyになるというストーリー。

参加者の年代が16歳から69歳と幅広く、高校演劇部の参加者もいれば、全く演劇に関わったことのない参加者もあり、世代間の交流も図りながら劇をつくっていくのが印象的であった。



プログラム詳細

職員向けインリーチ②「企画づくり」

1月29日（水）14：00～17：00

会場：松山市民会館小ホール

参加者：14名（財団職員10名、松山市職員4名）

財団職員、松山市職員交えての企画づくり。

まずTJから富士見市で行った事例を紹介。その後、グループに分かれ松山の良い所（満足しているところ）、松山の悪い所（困っているところ）を考える。「50年後、良い所が無くなっていると想像されるものを、文化の力を使って残すにはどうしたらいいか?」「逆に、悪い所を50年後に文化の力を使って良くするためにはどうしたらいいか?」を複数挙げ、その中から課題を一つに絞り、その課題を解決するための文化・アートを使ったプログラムを各グループで考えた。「災害防止」「文化ホールがなくなる」「変化を嫌う住民性」など様々な課題が挙がり、その解決策を考えていった。TJから年度毎に事業をこなすのではなく、10年単位でロードマップを作ったり、先を考えて企画を作ることが大切と教わる。

2回目のインリーチということもあり、財団職員と市職員間でスムーズに企画づくりを行うことが出来た。次年度からもこの協力体制を維持し、文化事業の活性化に取り組みたい。



●この事業への参加動機

当財団は、松山市が所有する公共ホールの指定管理者として、これまで市民参加型のミュージカルや、子ども対象の伝統文化継承事業、さらに文化・歴史などの学習講座を実施してきた。平成30年3月に、「松山市文化芸術振興計画」が策定され、市民の創造性や表現力の向上に加え、文化芸術の価値を他分野に活用することも求められるようになった。そこで、リージョナルシアター事業の演劇の手法を使ったワークショップでコミュニケーション能力や創造力の向上などに取り組むほか、インリーチにより組織内に新しい考えを取り入れ、さらなる文化芸術の振興に繋げていきたいと考えた。

●企画・実施において苦勞した点

当財団では、施設を活かした各種イベントや教室など文化・スポーツの各事業について、これまで常に収支バランスを意識しながら行っている。そのため、リージョナルシアター事業のプログラムを実施する際の事業意義や費用対効果の説明に苦勞したほか、アウトリーチの派遣先である小学校では、「演劇」を用いたワークショップによる目的（ねらい）や効果が、どの教育カリキュラム（道徳・総合的学習）に該当するのか説明に苦慮した。また、小学校に講師を派遣して行うアウトリーチ事業が「教育的要素」を含むため、これまで市の指定管理者として「ホール活性化」や「文化振興」を進めてきた当財団にとって事業の実施についての抵抗感もあった。

●プログラムを実施した成果

子ども対象のワークショップ、アウトリーチ及び一般向けワークショップは、参加者から「面白かった」「見知らぬ人との繋がりができてよかった」「また参加したい」との意見をいただいたほか、保護者や先生などからも「良かった」と概ね好評な意見をいただいた。また、派遣されたアーティストや地元の芸術家、学校の先生など、様々な人との「つながり」ができた成果もあった。そのほか、今回の取組の中で、文化面の成果は一朝一夕にできるものではなく継続していくことが重要であるとの共通認識を職員間で共有することができたことや、当初ハードルが高いと考えていた「演劇手法」のワークショップが、講師や関係者の方々のご協力により、様々な場面で活用できることを学ぶことができた有意義な事業となった。

●今後の展望

今回の事業を進めていく中で財団職員と松山市職員、さらに「松山市文化芸術振興計画」の実現のため、公・民・学が協働して立ち上げた「松山ブンカ・ラボ」との連携体制を構築することができた。今後は、この連携体制を活かし、さらなる事業展開を図っていききたいと考えている。また、今後の事業発展には、地元のアーティストの発掘や学校との連携が必要不可欠なテーマとなるため、事業継続による実績づくりに加え、地元アーティストの発掘・育成にも取り組んでいきたい。

コミュニケーション

多田 淳之介

松山市でのリージョナルシアターは、松山市の文化政策と財団の施設運営を今後どう関連付けていくかというミッションがかなり初期段階からはっきりしていて、事前の研修会から市の担当者と財団の担当者が一緒に参加しました。大抵の自治体の文化政策は行政か財団のどちらかに専門性があってもどちらかは機能していないことが多いので個人的にも興味のあるミッションでしたが、ただその難しさもわかっているので、問題はどこまでやるか、できるかでした。話を伺うと、財団側はアウトリーチや技術習得ではないワークショップについては知識、経験共に全く無いとのことで、プログラムとしてはとにかくインリーチ、公募ワークショップやアウトリーチも松山市と財団が協働する体験になるよう、すべてインリーチとしての現場体験プログラムとしての意味を持たせる方向になりました。市と財団の職員の関係は、これも全国でよくある状況ですが、仕事以外の会話をすることもなく、財団は市から降りてくる事業を煙たがる傾向すらある、というところからスタートしました。ちなみに財団は文化スポーツ財団なのですが、職員の多くはスポーツ出身で野球の四国リーグの立ち上げを担った方や国体選手、日本記録保持者もいたりして事業もスポーツ寄りでした。

1回目派遣では小学生対象の公募ワークショップと市と財団職員合同のインリーチワークショップ、2回目派遣では小学校アウトリーチ、一般向け公募ワークショップ、2回目の市と財団職員合同インリーチを行ないました。今回は1回目を7月、2回目を1月と時期を空けたことでその間に市と財団がコミュニケーションを重ねることができ、結果的には7月と1月では現場の雰囲気は全く変わっていました。本当に単純なことで、双方にどういう人物がどういう思いで働いているか、コミュニケーションをとりお互いを知るだけで、こんなにも現場がスムーズに動くようになるのかと改めてコミュニケーションの力を感しました。この事業に参加することでコミュニケーションを取るようになった、というだけでもこの事業の効果はあったと思います。1回目派遣のインリーチでは演劇を使ったワークショップの体験、2回目は松山市の50年後のビジョンを考え具体的に企画に落としこむワークショップをやりましたが、行政と財団、共に松山の文化を担う職員達がフラットに未来のビジョンを話している姿はこれまでこの自治体には無かった光景で、この事業の意義を非常に感じることもできました。

プログラム終了後のフィードバックでも今後に向けた建設的な意見が多数出て、財団の職員の方からは、こういったアウトリーチやワークショップは文化を利用、搾取している印象があつて否定的だったが今回で見方が変わったという発言もあり、発言の内容自体も嬉しいですが、こういった本音の発言が出る関係になったというのが大切です。文化行政と現場の橋渡しに悩んでいる自治体は多いと思いますし、どこの自治体でも今回のリージョナルシアターのような形で上手くいくかはなんとも言えませんが、やる気のあるところは変わり、どんどん差がつくのは間違いなさそうです。松山市の場合は行政に文化の専門家がいるわけではありませんが、愛媛大学内に文化政策の実行部隊として「松山ブンカ・ラボ」を発足し専門家を雇用するなど全国的に見ても画期的な取り組みをしています。そして財団にも文化の専門職員を雇用するそうで、もともとスポーツでもさすが一流を知る職員の方々だけあつて文化芸術とも共通点、協働できる点をいち早く掴んだ様子も見られます。今後の松山には是非全国のモデルとなるような活動を期待しています。

九重文化センター（大分県九重町）実施データ

| | |
|---|---|
| 実施団体 | 九重町教育委員会 |
| 実施ホール | 九重文化センター |
| 担当者 | 畑山伸恵 |
| 実施期間 | 下見派遣 令和元年5月31日（金）～6月1日（土） 1回目派遣 令和元年9月5日（木）～9月8日（日） 2回目派遣 令和元年10月3日（木）～10月6日（日） |
| アーティスト等 | アーティスト：福田修志 アシスタント：松本恵、田中俊亮 |
| <p>■下見派遣内容</p> <p>5月31日（金）会場下見・打ち合わせ（ホール・飯田小学校・野矢小学校） 6月1日（土）町内視察、企画内容打ち合わせ</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>9月5日（木）会場下見（南山田公民館）、打合せ 9月6日（金）飯田小学校1～6年アウトリーチ（2回に分けて） 打合せ（翌日の内容について） 9月7日（土）子ども公募ワークショップ「劇遊びシリーズ①」 打合せ（2回目派遣の内容について） 一般公募ワークショップ「名前をつけよう①」</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>10月4日（金）野矢小学校1～6年アウトリーチ 打合せ（翌日の内容について） インリーチ 10月5日（土）親子公募ワークショップ「劇遊びシリーズ②」 一般公募ワークショップ「名前をつけよう②」 一般公募ワークショップ「夜の公民館プロジェクト」 10月6日（日）フィードバック</p> | |

スケジュール

| 派遣回 | 下見派遣 | | 1回目派遣 | | | | 2回目派遣 | | | |
|-------|--------------|------|-------|--------------------------------|---------------------------------|------|-------|--------------------------------|--------------------------------|-------------|
| | 5月31日 | 6月1日 | 9月5日 | 9月6日 | 9月7日 | 9月8日 | 10月3日 | 10月4日 | 10月5日 | 10月6日 |
| 9:00 | 移動 | 町内視察 | 移動 | 飯田小学校 アウトリーチ 10:45～12:20 | 子ども公募 ワークショップ 10:30～11:30 | 移動 | 移動 | 野矢小学校 アウトリーチ 10:40～12:15 | 親子公募 ワークショップ 10:00～11:30 | フィード バック |
| 10:00 | | | | | | | | | | |
| 11:00 | | | | | | | | | | |
| 12:00 | 打合せ ホール下見 | 打合せ | 会場下見 | 飯田小学校 アウトリーチ 13:55～15:30 | 打合せ | 移動 | 移動 | 打合せ | 一般公募 ワークショップ 14:00～16:00 | 移動 |
| 13:00 | | | | | | | | | | |
| 14:00 | | | | | | | | | | |
| 15:00 | 飯田小学校 打合せ | 移動 | 打合せ | 打合せ | 一般公募 ワークショップ 17:30～19:30 | 移動 | 移動 | インリーチ 18:00～19:30 | 一般公募 ワークショップ 19:30～21:00 | 移動 |
| 16:00 | | | | | | | | | | |
| 17:00 | | | | | | | | | | |
| 18:00 | 野矢小学校 打合せ | 移動 | 打合せ | 打合せ | 一般公募 ワークショップ 17:30～19:30 | 移動 | 移動 | インリーチ 18:00～19:30 | 一般公募 ワークショップ 19:30～21:00 | 移動 |
| 19:00 | | | | | | | | | | |
| 20:00 | | | | | | | | | | |
| 21:00 | | | | | | | | | | |

プログラム詳細

飯田小学校アウトリーチ

9月6日（金）10：45～12：20

会場：九重町立飯田小学校

参加者：31名（1～3年生）

プロの役者さんによるお芝居「宝探し」の観劇で、集中力が高まった子どもたち。続く、心と体をほぐす準備運動では、「大人でもやったことがないことは急にはできない。できないから止めた！ではなく、できないことを楽しんで」という福田さんからのメッセージが印象に残っています。

後半は「物語を生み出すワークショップ」。低学年でも、話の続きが気になるようなストーリーを作り上げることができ、「おもしろかった」「楽しかった」と感想が出されました。

先生にも見学していただきました。教室やグループから抜け出す児童もいますが、参加を促す声かけをしなくても、どこかの場面で自ら参加している様子が見られました。



飯田小学校アウトリーチ

9月6日（金）13：55～15：30

会場：九重町立飯田小学校

参加者：23名（4～6年生）

午前中と同じ学校で、1～3年生と同じプログラムでの実施でした。文化や多様な大人にふれる機会が少ない環境にある、小規模校です。お互いを知っている間柄であるため、日頃は伝える努力は少なくても済みますが、「相手にしっかり話をして、気持ちを伝えること」が成功の秘訣だという、2人組の準備運動を実施してくださいました。

プログラムの後半には、体を前のめりにして参加する様子がみられました。「みたり、やったりして、楽しかったです」という感想が出され、やる人・みる人・きく人がいないと成り立たない「表現」というジャンルを経験できたようです。「拍手」も表現方法の1つであることを教えていただきました。



子ども向けワークショップ「劇あそびシリーズ①～桃太郎～」

9月7日（土）10：30～11：30

会場：九重文化センター

参加者：38名（うち、子ども24名）

2歳～小学生を対象に公募した桃太郎の劇ワークショップ。

小道具が1つもない桃太郎を上演後、子どもたちに小道具作りの作業をしてもらいました。その後、作った小道具をすべて使った桃太郎を再演していただきました。終了後、子どもたちは満足そうに小道具を持ち帰っていましたし、付き添いで来ていた大人たちも感嘆の様子でした。参加者に、ホールや演劇を身近に感じてもらうというワークショップのねらいを達成できました。

また、九重町民劇場の方にスタッフとして関わっていただき、演劇によるワークショップの経験値を積むことができました。



プログラム詳細

一般向けワークショップ「名前をつけよう①～九重町の魅力・トマトとお茶～」

9月7日（土）17：30～19：30

会場：南山田公民館

参加者：14名

九重町のトマトとお茶をテーマに想像を楽しむワークショップ。身近にありながらも気づいていないような九重町の魅力との出会い・再発見の場になることもねらって開催しました。

頭の体操に引き続き、不思議な生き物の絵を見て名前や性格などを考えることから始めました。後半には、トマトを使った料理一品ずつに、料理の名前・キャッチコピー・説明文を考える内容でした。お茶にも名前を考えました。

「内容が新しくとても面白かった」「他の人の発想や考えにふれられて新鮮だった」などの感想から、大人にとっても遊びの場として、ホール・公民館をアピールするワークショップとして、第一歩を踏み出しました。



野矢小学校アウトリーチ

10月4日（金）10：40～12：15

会場：九重町立野矢小学校

参加者：25名（1～6年生）

飯田小学校と同じプログラムでの実施でした。心と体をほぐす準備運動では、みんなで1つの輪になって、見えないボールを一周させた後、その見えないボールがだんだん大きくなっていく、また、だんだん小さくなっていく課題に想像力を働かせて取り組みました。学年や性格に関係なく、見えないボールを「見える」表現をする子がいて驚きました。

縦割り班で3グループに分かれた子どもたちは、3枚の写真からおもしろい物語をグループごとに作り上げました。終了後に、先生から「日頃は怒られることが多い子の表現がおもしろかった」「日頃の様子と違う、子どもの光る一面が見られた」と感想をいただきました。演劇特有の「おもしろい」という物差しや「受け入れる」ことを大切にしている演出家の意図が先生に伝わったと感じました。



職員対象インリーチ

10月4日（金）18：00～19：30

会場：九重町役場

参加者：18名

演劇アウトリーチの実施・継続に向け、学校職員及び町職員の理解は必須ということで実施したインリーチ。

スキンシップの伴うアイスブレイクで、参加者の距離が一気に縮まった後、小学校で行った「物語を生み出すワークショップ」を体験してもらい、その効果を実感・共有しました。

「Yes And～まず受け入れる～」や「ひとりでは生み出せないものが、かけ算のようにどんどんおもしろくなっていく」演劇・演出家の力を実感したという感想が多かったです。

「子どもの貴重な体験になる」「新入生同士の仲を深めるのに有効」などと、児童生徒にもアウトリーチをぜひ体験させたいという意見も出されました。



プログラム詳細

親子向けワークショップ「劇あそびシリーズ②～飛び出せ！私の絵日記～」

10月5日（土）10：00～11：30

会場：九重文化センター

参加者：11名（子ども7名、大人4名）

小学生の親子を対象に公募したワークショップ。

心と体をほぐす準備運動とコミュニケーションゲームに取り組んだ後、「今年一番心に残った日の思い出」をテーマに絵日記を描いてもらいました。絵日記を描いた人が作・演出の立場になって、他者とコミュニケーションを図りながら絵日記を舞台上に再現するという内容でした。

「体でやってみる（表現する）と楽しかった」という感想が出され、絵が苦手な子もいましたが、子ども全員が各々の絵日記を再現することができた満足感を感じていました。

また、日頃あがることのないホール舞台でのワークショップが貴重な経験にもなったようです。



一般向けワークショップ「名前をつけよう②～九重町の魅力・ブルーベリー～」

10月5日（土）14：00～16：00

会場：ベリージュファーム

参加者：12名

「名前をつけよう①」と同じ流れとねらいで、テーマと場所を変えて実施しました。テーマにしたブルーベリーは、町民の知名度は高いですが、場所は、町民は利用する機会が少ないであろう、町内の摘み取り農園に隣接する東屋を使用させていただきました。

5歳から60代までの幅広い年代の方が参加してくださいましたことで、楽しさが倍増しました。8歳のお子さんから「とってもたのしかった。たべたり、あたまのたいそうがたのしかった」と感想をいただき、子どもの柔軟な発想にふれることができた大人からも「他の人の発想を共有する楽しさを感じました」「普段経験できない楽しみ方ができて嬉しかった」と、満足度の高いワークショップになりました。



一般向けワークショップ「夜の公民館プロジェクト」

10月5日（土）19：30～21：00

会場：九重文化センター

参加者：25名（うち、大人9名）

若い世代とホール・公民館がつながりたいというねらいで開催したワークショップ。

夜の公民館で、本気で大人も楽しめる遊びとして、今回は「宝探し」を選択しました。宝物を隠すチームと探すチームの2チームに分かれて、途中でクローズドクエスチョンを活用したヒント係も登場するなど、対決とあって本気になって楽しむことができました。

「地域での楽しみができ楽しかった」「またやりたい」という声が多く聞かれ、遊びの場をホール・公民館が提供するという手ごたえを感じることができました。今回を初回と位置づけ、若い世代を対象とした「夜の公民館プロジェクト」の継続に向け取り組むきっかけになりました。



●この事業への参加動機

九重町では約20年間活動している九重町民劇場があるが、近年では団員の高齢化などにより活動の継続が困難になってきている。演劇の表現方法を使ったワークショップを、九重町民劇場の団員をはじめとする地域の方々に体感してもらうことで、地域文化の継続・発展と、地域活性化の新しい局面を探りたいと考えた。

また、小中学生といった地域の子ども達に、一流のアーティストとのふれあいにより文化芸術の素晴らしさを感じてもらい、そのことを通して自らの地域の豊かさに気づききっかけにもしてほしいと考えた。

●企画・実施において苦勞した点

九重町として演劇のワークショップの経験がなかったため、担当者自身が「演劇の手法を使ったワークショップ」の内容及び成果のイメージがしづらく、企画の段階から苦勞した。全体研修会で、九重町の人口9,000人をつなぐプロジェクトを展開しようというコンセプトが決まってからは、今年の本事業で、何と何をつなぐワークショップをするか悩んだ。

つなぎたいもの・人の候補先に、事業の説明・依頼に回った際、「もう少し早い段階で相談してくれていれば…」と言われることが多く、ワークショップ当日までの事前のスケジュール管理が反省点として残った。

1回目派遣のチラシの紙面づくりにも苦勞した。苦勞した理由は、上述と同様である。そのため、1回目派遣を経験した後の、2回目派遣のチラシの紙面づくりは楽しく取り組めた。しかし、ワークショップ参加者集めには、1回目派遣・2回目派遣とも苦勞した。

●プログラムを実施した成果

何かと何かをつなげた先に何を指すか、というねらいについては、下見の際に明確になった。「町民の遊びの場・時間を、ホール・公民館が提供する」「本物の芸術（演劇）にふれられる機会を、町内すべての子どもにも提供する」である。

そのねらいを達成するために必要なプログラムは何なのか。公募型のワークショップを様々な形で挑戦できたことで、町民受けの良いプログラムを見つけることができた。

当初、演劇のワークショップをイメージできる人が皆無だった九重町において、のべ197人まで参加者・体験者が増えたこと、さらに今回、ワークショップの提供側として、九重町民劇場の団員に入ってもらい経験してもらえたことも成果である。何より、担当職員として私が、企画力・プレゼンテーション力・想像力を鍛えられる、職員研修としての成果もあった。

●今後の展望

「町内すべての子どもに、本物の芸術（演劇）にふれられる機会を提供する」という当初掲げたねらいを達成するためにも、学校へのワークショップは来年度以降も継続して実施することが必要である。

今後、町民の遊びの場・時間を提供するホール・公民館の位置づけを定着できるよう、「演劇の手法を使ったワークショップ」を継続すること、さらに、主なターゲットを若い世代と設定しつつも、幅広い年代を巻き込めるような事業展開を見出ししていくことが必要と考えている。

そのためにも、ホールが九重町民劇場と共に成長していけるよう、人材育成・住民組織支援を重視した仕事を心がけたい。

小さな街だから出来る繋がり の強さ

福田 修志

人口9000人ほどの小さな街、大分県玖珠郡九重町。山に川に温泉にと、自然の恵み溢れる街並には、ゆるやかな時間が流れ、心も体も癒されます。役場のある一帯には、この街唯一の統合された中学校と、保健福祉センター、そして中央公民館という位置づけの九重文化センターがあり、街の主要な機関が集まっています。

4月の全体研修会にやって来た担当者の畑山さんは、保健福祉センターからこの春に九重文化センターに異動になったばかり。右も左も分からないまま全体研修に挑むことになり、さぞ辛かったろうなと想像します。それでもこの事業を最後までやりきり、驚くべき進化を遂げたのは、畑山さんのガッツと人柄によるものが大きいと感じました。

担当者としては何も分からない状態からのスタートにはなりましたが、方向性だけは最初にしっかりと構築できました。「日本一の田舎町を目指す」という九重町の方針があることから、「9000人が手を繋ぐ」という明確な方向性を描き、そのために演劇を使おうということに。ここが最初に描けたからこそ、最後までやりきれたんだと思います。方向性を見失ったり、見つけられないまま進んでいくことほど、辛い旅はないのですから。

下見の日程の中で、打ち合わせをすると「公園が無い」という事実が分かりました。だとすれば、九重文化センターが公園の役割を担っていかうという方向に。街の人が集い、関わり、楽しむことを提供する。それは必ずしも、施設の中である必要はありません。外で開催するワークショップがあっても良いし、学校へのアウトリーチという形でも良い。様々な企画を町民に提示して何がヒットするのか？というリサーチも兼ねたプログラムを考えたところ、畑山さんが選んだのは『子どもを主体とした内容で大人が参加出来る』という企画でした。大きく分けると『演劇を前面に出したプログラム』と『前面に出さないプログラム』。前者には「学校アウトリーチ」「桃太郎の小道具を作ろう」「九重町24時」「飛び出せ絵日記」。後者には、九重町の食べ物に「名前をつけよう」というワークショップ。何が九重町の人々の心にヒットするのか、ワクワクとドキドキで始まった募集でしたが、1回目派遣で実施予定だった「九重町24時」の応募がゼロとなり再考が求められ、「夜の劇場で宝探しをする」というワークショップを2回目派遣で実施することとなりました。これが予想以上に大当たりし、早い段階で定員ストップに。担当者としても、再考する時間を貰えたことが1つの要因かもしれません。実施して、反応を見て、意見や感想を聞いて、企画を練り直す。正しく演劇の創作現場で行われているトライ&エラーの繰り返しですが、より良い企画にとって必要な時間なのだと改めて感じました。

担当の畑山さんが母親という立場だったというのも、こういった企画を立てる上では大きなポイントでした。「自分の子どもを参加させたい」と思える企画かどうかや、参加しやすいと思える時間設定や内容などを母親目線で考えることが出来るということは、実は大切なことなのかもしれません。もちろん、主観的になり過ぎてはいけない話ではありますが、子育てをしているか、していないかの経験の差はこういった企画においては大きく、ママ友との繋がりから宣伝も出来ます。

人との繋がりを普段どれだけ作れるかが、より良い企画立案や運営に必要な大切な要素です。九重町にはそれがあって、実行出来ます。各公民館が連携して、それぞれの事業にみんなで協力する一体感があります。小さな街だからこそ持ち得る大きな力は、この先の事業にもきっと力になってくれると信じさせる力がありました。

門川町総合文化会館（宮崎県門川町）実施データ

| | |
|--|--|
| 実施団体 | 公益財団法人門川ふるさと文化財団 |
| 実施ホール | 門川町総合文化会館 |
| 担当者 | 岩切義樹 |
| 実施期間 | 下見派遣 令和元年6月3日（月）～6月4日（火） 1回目派遣 令和元年8月23日（金）～8月26日（月） 2回目派遣 令和元年12月12日（木）～12月14日（日） |
| アーティスト等 | アーティスト：有門正太郎 アシスタント：木下海聖、中川歩（1回目）、加賀田浩二、門司智美（2回目） アドバイザー：内藤裕敬（2回目視察） |
| <p>■下見派遣内容</p> <p>6月3日（月）打合せ・ホール下見、町内視察（西門川、庵川地区）、かどがわワンパク実行委員会打合せ 6月4日（火）子育て支援センター打合せ、一本松倶楽部打合せ、町内視察、最終打合せ</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>8月23日（金）町内下見・写真撮影・会場準備 8月24日（土）かどがわワンパク実行委員会ワークショップ①、職員向けインリーチ 8月25日（日）かどがわワンパク実行委員会ワークショップ②、かどがわ演劇の広場ワークショップ 8月26日（月）フィードバック、子育て支援センター打合せ（2回目派遣打合せ）</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>12月12日（木）町内視察、打合せ・会場準備 12月13日（金）子育て支援センターワークショップ、門川町内職員向けインリーチ 12月14日（土）フィードバック</p> | |

スケジュール

| 派遣回 | 下見派遣 | | 1回目派遣 | | | | 2回目派遣 | | |
|-------|-----------------|---------------------------|--------------|------------------------------|--------------------------------|--------------|-------------|------------------------------|---------|
| | 6月3日 | 6月4日 | 8月23日 | 8月24日 | 8月25日 | 8月26日 | 12月12日 | 12月13日 | 12月14日 |
| 9:00 | 移動 | 子育て支援センター打合せ 一本松倶楽部打合せ | 移動 | かどがわワンパクWS① 9:30～11:30 | かどがわワンパクWS② 9:30～11:30 | フィードバック | 移動 | 子育て支援センターWS 10:00～11:30 | フィードバック |
| 10:00 | | | | | | | | | |
| 11:00 | | | | | | | | | |
| 12:00 | 打合せ ホール下見 | 町内視察 | 町内視察 写真撮影 | 職員向け インリーチ 13:30～16:00 | かどがわ 演劇の広場WS 14:30～17:00 | 子育て支援 打合せ | 町内視察 | 職員向け インリーチ 13:30～16:30 | 移動 |
| 13:00 | | | | | | | | | |
| 14:00 | 町内視察 | 最終打合せ | 会場準備 | | | 移動 | 打合せ 会場準備 | | |
| 15:00 | | | | | | | | | |
| 16:00 | 移動 | | | | | | | | |
| 17:00 | | | | | | | | | |
| 18:00 | かどがわワンパク 打合せ | | | | 意見交換会 | | | | |
| 19:00 | | | | | | | | | |
| 20:00 | | | | | | | | | |
| 21:00 | | | | | | | | | |

プログラム詳細

かどがわワンパク実行委員会ワークショップ「まちの魅力発見塾 ～かどがわストーリーは突然に～①」

8月24日（土）9：30～11：30

会場：門川町総合文化会館リハーサル室

参加者：10名

門川町のまちや人を好きになってもらうことを目的に、まち歩きや伝統文化体験など、地域の人たちが企画した手作りのプログラムが体験できるイベント「かどがわワンパク」を開催している実行委員会のメンバーを対象に、「想像力を豊かにして自分たちのまち『かどがわ』を見つめ直す」をテーマにワークショップを行った。まずは参加者それぞれの自己紹介の中でしっかりヒヤリングを行い、簡単なゲームでコミュニケーションを深めたあと、昭和の時代に撮影した門川町内の記録写真をもとに、まちの歴史や産業など昔の記憶を紐解き過去に遡ることで現状を認識。その後3つのグループに分かれて、新しいプログラムを企画し発表を行った。

これまで会議で実行委員会メンバーが企画内容を考える時間が少なかったため、参加者からは今後も今回のように、様々な資料を元に、ディスカッションできる場を設けて欲しいとの要望が出た。



職員向けインリーチ「どきどき！ワクワク！新発見！！」

8月24日（土）13：30～16：00

会場：門川町総合文化会館ステージ

参加者：13名

文化会館の舞台上を会場に、有門氏が学校で行っているアウトリーチプログラムを、門川町や当財団の職員が「実際にどんなことをやるのか？」「どんな効果があるのか？」という解説を聞きながらインリーチプログラムとして体験した。

まず自己紹介の後、自由に体を動かしたり、簡単なゲームをして緊張をほぐしたあと、有門氏が用意した絵や写真を使って、固定概念にとらわれなければ同じ画像でも見る視点でいろいろなものに見えることを解説。その後、事前に館内で撮影した写真を引き伸ばしたものにゲルマーカーで絵を加えて物語を考えた。

初めはどんなことをやるのか理解できず不安がっていた参加者も実際にワークショップを体験すると楽しかったようで、「いろいろな見え方、考え方、表現の仕方があって、それを受け入れることを大切にしたい」との声があがった。



プログラム詳細

かどがわワンパク実行委員会ワークショップ「まちの魅力発見塾 ～かどがわストーリーは突然に～②」

8月25日（日）9：30～11：30

会場：門川町総合文化会館リハーサル室

参加者：8名

「かどがわワンパク」を開催している実行委員会メンバーへ行ったワークショップの2回目。1回目とは異なる参加者を対象に、前回と同じく「想像力を豊かにして自分たちのまち『かどがわ』を見つめ直す」をテーマにワークショップを行った。今回も自己紹介に時間をかけて、有門氏がしっかりとヒヤリングを行った上で問題点を探り、グループに分かれて「かどがわ」の良いところ、悪いところなどを発表しあった。

その後ランダムに3つのグループに分かれ、まちの現状を認識した上で、グループごとに新しいプログラムを企画し発表を行った。これまで「かどがわワンパク」それぞれの個人や団体が独立した形でプログラムを実施していたが、同じ日に同会場で開催するなどのコラボレーション企画も出たりと、参加者からはとても参考になったとの感想があがった。



演劇ワークショップ「かどがわ演劇の広場」

8月25日（日）14：30～17：00

会場：門川町総合文化会館ステージ

参加者：10名

当財団が毎年主催している演劇ワークショップ「かどがわ演劇の広場」の受講生を対象に、有門氏が学校で行っているアウトリーチプログラムを行った。参加者は小学生から80歳代まで幅広く、まず有門氏が滑舌の練習として有名な「外郎売り」を高速で披露。体を動かしたり、簡単なゲームをして緊張をほぐしたあと、有門氏が用意した絵や写真を使って、固定概念にとらわれなければ同じ画像でも見る視点でいろいろなものに見えることを解説。小学生からは自由にいろんな発想で言葉が出て、大人とのギャップを感じた。

また事前に館内で撮影した写真を引き伸ばしたものにゲルマーカーで絵を加えて情景を考えた。その後、ランダムに3つのグループに分かれて、それぞれの絵を組み合わせて物語を作り発表を行った。普段演じる事には慣れている受講生も、物語を作ることは初めてで、新しい体験が刺激となった。



プログラム詳細

子育て中の母親へのワークショップ「子育てママの新発見！！」

12月13日（金）10：00～11：30

会場：門川町総合文化会館ステージ

参加者：11名

門川町子育て支援センターとの共催で、子育て中のお母さん、お父さんを対象にワークショップを行った。今回も自己紹介からゲームによるアイスブレイク、グループディスカッションを行い交流を深めた後、有門氏が用意した絵や写真を使って、固定概念にとらわれなければ同じ画像でも見る視点でいろいろなものに見えることを解説した。

その後、前日に視察で訪問した門川湾の離島で撮影した様々な写真にゲルマーカーで絵を加えて物語を考え発表を行った。またこの日は託児所を設け、ボランティアスタッフが子供に対応。参加者からは「子供に気を使わず参加できたので、とても楽しい時間を過ごせた」「参考にして子供と一緒に遊んでみたい」との声が出ていた。またこれを機会に参加者同士の交流が深まり、センターでのコミュニケーションも円滑になったようである。



職員向けインリーチ「どきどき！ワクワク！新発見！！～ありのままの姿を自然体で受け入れてみよう～」

12月13日（金）13：30～16：30

会場：門川町総合文化会館ステージ

参加者：8名

保育士や児童クラブなど門川町で子育てに関わる職員を対象に「お互いのコミュニケーションを深め、自由な考えをシェアすることで、新しい発見を導く方法を学ぶ」をテーマに講座を実施。今回も有門氏が学校で行っているアウトリーチプログラムを「実際にどんなことをやるのか？」「どんな効果があるのか？」という解説を聞きながらインリーチプログラムとして体験した。まず自己紹介やゲームなどアイスブレイクのあと、有門氏が用意した絵や写真を使って、固定概念にとらわれなければ同じ画像でも見る視点でいろいろなものに見えることを解説。その後、前日に現地視察にて撮影した写真にゲルマーカーで絵を加え、ランダムに分けた3つのグループで物語を作り発表を行った。参加者からは「学校の先生に体験して欲しい！」「広い視野、考え方を持つことで、いろんなことを受け入れる事ができ、それにより心が軽くなる」などの感想が出ていた。



●この事業への参加動機

公益財団法人門川ふるさと文化財団では、20年ほど前より劇団「こふく劇場」（宮崎県都城市）が、宮崎県北の演劇活動拠点として制作と公演を繰り返し開催。また同劇団の協力のもと、小中学生向けの演劇講座や地元高校での演劇ワークショップと文化祭発表公演への協力、一般向けの戯曲講座などを継続して行うことで、地域における演劇文化の振興を行ってきた。それにより市民劇団が立ち上がるなど演劇へ興味を持つ人は増えて来たが、若者の進学や県外への就職などで定着が困難な現状である。そこで今回はリージョナルシアター事業を活用することで、異なる世代に演劇に対するアプローチを深め、また行政や町内の職員に演劇の手法を使ったアウトリーチに理解を求めたいと考え事業へ参加した。

●企画・実施において苦勞した点

当初「市民劇団を立ち上げたい!」「地元の高校に演劇部をつくりたい!」との目標を設定していたが、事前の打ち合わせで有門さんや地域創造の担当者より「地域の人たちから、それを求められているのか?」との疑問を投げかけられ、そうでないため目標を変更。「まちの人たちの抱えている様々な問題を演劇の手法を使って解決する」ことをテーマに、現在門川町で取り組んでいるまちづくりの事業「かどがわワンパク」の実行委員会や関係者、子育て中のお母さんやそれに係る職員、現在実施中の演劇講座「かどがわ!演劇の広場」の受講生などにワークショップを開催する事にした。しかし行政の担当者が異動になることでうまく連携がとれず、また職場内での情報共有も満足でなかったため、準備が滞り参加者の募集に苦勞した。またワークショップの開催前に参加者の名簿など有門さんへの情報提供が出来ていなかったため急遽内容を変更するなど迷惑をかけてしまった。

●プログラムを実施した成果

事業の内容を理解してもらうことが難しく募集には苦勞したが、参加した方々には概ね高評価をいただいた。とくに2回に分けて開催した「かどがわワンパク」実行委員会を対象にしたワークショップでは、参加者のコミュニケーションが深まったのと門川町の歴史や名産品など情報を知ることができて今後のプログラム作りのヒントになり「今後も今回のように参加者が集まってディスカッションできる場が欲しい」との意見が出ていた。また、子育て中の職員やお母さんを対象にしたワークショップでは「楽しかった。普段気難しい表情で頑張っている先生たちに是非受けてもらって、子どもたちを笑顔で迎えることができる余裕を持って欲しい」「子どもの個性を大切に、子どもの自由な発想や声に耳を傾けることで楽しんで子育てをしたい」との感想が出ていた。

●今後の展望

私の認識ではセリフを読んだり、演技をしたりすることが「演劇ワークショップ」であると思っていたが、今回有門さんのワークショップを体験して、演劇の手法を使うことで多方面の対象者へアプローチできることを知りました。今後も「かどがわワンパク」の事業は継続されると思いますが、次回プログラムを企画する際に講師としてお呼びしたいと思います。また、門川町子育て支援センターは、年に2回ほど当財団の施設を利用して「子育て応援企画」の主催事業を行っているので今後もワークショップを提案していきます。

地域資源と公共ホールの役割

有門 正太郎

宮崎県門川町は宮崎県の北部に位置し日向灘に面した町です。人口1万7千人の水産業と農業など第一次産業が主な町にある門川町総合文化会館へ向かいました。

ホールを運営している（公財）門川ふるさと文化財団は、運動場や町民プールの運営も行っており、職員の方も施設管理の次の日はプールの監視員というような日もあるとのことでした。

ですが九州では演劇に積極的にアプローチしているホールとしての認識があり、私も以前1か月ほど門川で滞在制作しツアー公演を行ったこともあります。

今までとは違うアプローチ

今回は対象を演劇人ではなく、演劇を使いどう門川町民とつながれるかを軸に、プログラム構成しました。印象に残ったのが「かどがわワンパク」実行委員会を対象にしたワークショップ。参加者同士のコミュニケーションと門川独自のプログラムを考えてみようという枠組で行い、歴史や風土、過去の写真なども用いたことにより脱線ともとれる会話が思わぬヒントになり、「住んでいて当たり前」が、実は他所から見ると魅力的に見えたりすることを発見する時間は有意義でした。

子育て中のお母さん対象に行ったワークショップでは、参加者同士童心に戻ったようにプログラムに集中し楽しんでいました。「久しぶりに自分の為に豊かな時間を過ごせた事が嬉しかった、普段ではありえないが子どもの事を忘れられたのがかえって良かった」と言われたのが印象的でした。乳幼児を託児で受け入れる大変さがある中で、是非お母さん達に楽しんで受けて欲しいと、子育て支援センターの先生の熱量があつてのプログラムでした。

「何をするか」から「なぜするのか」へ

これまでも様々な事業を行っている門川町だからこそ、次へのステップが見え隠れするようになってきました。職員が少ない中で行っている事業数の多さに驚きもしました。担当者は「門川を演劇の町にしたい、いつか演劇フェスティバルを開催したい」という熱い気持ちがありながらも「門川の人には演劇公演はあまり見に来ません、多分興味がないんです」と言っていました。演劇を身近に感じないからこそ自分には遠い世界と思っている。自分の栄養にならないものには確かに興味は沸かない。そこを繋いでいくのが公共ホールの役割だと感じています。

有名人が出る鑑賞型の公演だけが演劇ではありません。私たちは常に演じているんです。会社の自分、好きな人の前の自分、家族と接する時の自分、どれをとっても違うんです。演じ分けているんです、立派な俳優ですよ。そして演劇で大切なコミュニケーション能力は普段の生活でも必要なのは。そしてモノづくりに不可欠な想像する事と創造する事。演劇には万能な接着剤のような効果がたくさんあります。それらを使いながらどうやったら町の人たちが心豊かに、そして身近に感じてもらえるかを模索していつてもらいたいと感じました。

海と山に囲まれ自然豊かな門川、ホールの目の前に無人島の乙島があります。そこで夏休みの事業でカヌー体験なども行っているそうでした。これから何か新しい事業をするのも良いですが、今までの事業に演劇的や音楽的なアプローチを少し入れていくだけでも随分見え方も変わってくるんじゃないかなと感じました。ここでしか出来ない事が沢山あります、可能性を信じて継続して欲しいです。

「演劇」が町民に身近に感じてもらえ、生活に必要だと感じたときにきっと「演劇フェスティバル」が開催されると信じています。

令和元年度リージョナルシアター事業報告書
発行・編集 ———— 一般財団法人地域創造
発行日 ———— 令和2年3月31日

